

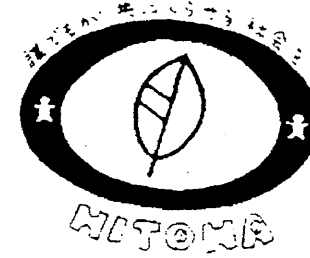
2021年(R3年)



No. 347

ひとはつゆくり

(題名: 齋藤心)



社会福祉法人 ひとは福社会
〒739-1203
広島県安芸高田市向原町長田1857番地
TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

(ホムパ-ツアド) http://hitoha-fukushi.com (メールアド) honbu@hitoha-fukushi.com

久しぶりに冬らしい天候で雪化粧した風景を見ると「寒いのは勘弁
だけど季節があるのはいいもんだ」と感じます。

さて、雪を見ると思い出すのが5年前のこと。大雪の中、田川幸義先生に

おいでいただいて、あっぷでアート活動をしたいという話をしました。快く
引き受けてくださり、あの日からひとはのアート活動はどんどん広がっていき
ました。今ではアートにかかわるきららも増え「この人はこんな絵を描く
んだ」と、いろんな才能があることを発見する機会ともなっています。その人
の作風をそのまま引き出す田川先生のすごさもあり、みるみる上達し、描き
始めた当初と比べると「うまくなったなあ」と、きららもスタッフも実感してい
ます。

安芸高田市内の喫茶店や金融機関など、展示していただけるところ
が広がっており、今年もいろんな作品が生まれていきます。

(就労センター あっぷ 城崎 高治)

●●あたらしく入った
ひとはの仲間たち●●

2907

名前	小早川 洋治
所属	ひとは 作業所
最近始めたお気に入り	スマートフォンのカラオケアプリで 全国の方と歌うことです。



絵: 若月由美

～ひとは35周年によせて～

自治会きらら
井上 憲二さん

19歳でひとはに入社、今は32歳。
詩集を作って、ひとはに関わる人
に読んでもらいたい。3年前から
書いていた。
詩は中学生のころから書いており、
家で書く。



「ぼくの本
いまよみすすめる本
いまよみはじめの本
しょうせつかなパンがかな
一人一人ちがう本をよむ
本をよまないひとだっている
でもじぶんの人生。て一つの本
一人一人ちがう人生と言ふ名の本
ぼくの本。てどんな本
みんなの本。てどんな本
一人一人ちがうものがたり

ひとはスタッフ 則川 靖久さん。

① 私の中にあるひとはの記憶

ひとはを利用されていた方が近所において、ひとはつうしん(だったと思います)を
持ってこられたり、時々我が家で一緒に夕食を食べたりしていた小学生時代が、ひとは
を知るきっかけでした。その後ひとはに見学に行き「OOさんはここで働いていたん
だあ」というのが思い出に残っています。

② 明日のひとはへ

どんなことがあってもお互いを支え合うことができるのがひとはの良さです。
「きららもスタッフも同じ仲間なんだよ」という思いを持ち続けて
いきたいと思います。

「オレ、ひとは辞めます」

平田さんの願いは、ひとはを辞めること。

「退職届、用意してください」と言うこともしばしば。

しかし、平田さんにしかできない仕事は増えるばかり。

朝の掃除機がけでは「お弁当作っているので後かけまじゅうカ」と配慮ある発言。

みなさん、お弁当注文がたら平田さんに会いに来てください。

彼の笑顔と礼儀正しさは、ひとはを辞めたいなんてこれ、ほ、ちも感じさせないですから～!!

(ひとは工房 細野尚子)

「元気をいただきます」

向井さんの明るい声に迎えられる、窓での昼食配膳がスタートします。

「今日のおかずは何?」とか、日常のたわいのない会話もしながら、12時に食事スタート。片づけて帰る時にはうっかり者の私を気遣って、きくら達から「忘れ物はない?」「荷物を落とさんなよ～」と優しく声をかけてもらっています。

そして「ありがとうございました」という声に見送られ窓での仕事終了!! きくら達とのコミュニケーションでたくさんの元気をいただいています。(食事部 小川優子)

「仕事はじめ!」

新年の本格的な製造開始! と思いきや初日早々、午前中はトラブルがありテンヤワンヤ! 午後製造をバタバタ行う中で「も～! 誰ですか! こんなに忙しくさせているのは!」と冗談交じりで怒るように話す宮崎さん。仕事のありがたさを感じつつ、みんなで「ゆっくりしたいね」と本音を語り合っていました。

今年は「のんびりと」「ゆったりと」製造したいものです。

「も～!」 (就労センターあっぷ 益田博之)

「松本の抱負(?)」

ひとはでもほとんどのイベントが無くなり、きらは「しょうがない」と口では言いながらも、内心すごく悔しい思いをしています。そこで、苦肉の策として「ひとはの絆まつり」YouTube配信を行いました。まだしばらく今までの生活には程遠いように感じます。こういった状況が続く、うんざりしてばかりではられません。今年1年面白いことを考え、みんなの笑顔をジャッターに収めてみんなに届けられたいと思います。(ああ、かなりプレッシャーだわあ...。)

(ひとは工房 松本拓也)

「ありがとう、愛さん」

昨年11月末、作業所の大切なメンバー、大久保愛さんが去られました。私のことは「お兄ちゃん! お兄ちゃん!」と呼ばれていて「名前でご呼んでください」と言うといや! というようなはきりとした性格の女性でした。体調が悪化するにつれ作業もままならない状況ではありましたが、本人の「一緒に楽しく過ごしたい」という希望もあり、たとえ座っているだけの状態でも私たちに力をくれる、まるで太陽のような存在でした。私が作業所に配属となり約2年間と、愛さんの人生の中では短い関係ではありましたが、今でも心の中で笑っています。(ひとは作業所 井上大輔)

編集後記
愛ちゃんのおかげで僕はひとはに入社した。話し始めたのは高伏さんです。「愛ちゃんのお母さん(千代田町石井谷の人。僕が(以島学園)高等部を卒業して行く所がた、正確、ひとはに入らんが、と語る、とくれたのは愛ちゃんのお母さん。千代田のヤンクスで愛ちゃんを見たことがある。愛ちゃん(エゼー)が好きな(正)上ね。愛ちゃん(エゼー)とすつらご飯を食べることできない。ひとはに入ると僕みたいな(エゼー)ご飯を食べらん人(正)いることを知った。」高伏さんの中にあり大久保さんと大切記憶としてここに記します。